

「はい ちょっと ちくっと しますよ」看護婦さんが、オレの右腕に注射の針を刺した。献血では二回注射針を刺される。一回目は検査のための注射「献血は右でしましょう、左を出してください」と針を刺されたが、この針はほとんど痛くない「最近近代技術で極細の注射針が開発され、ほとんど痛みを感じない」というような事を聞いていたが、なるほど、それほど痛みは感じない。それに比べ献血用の注射針はやはり痛い、痛いけれども「イテテ」とも声を上げるわけにもいかず我慢である。話はそれるが、看護婦さん、最近看護師と呼ぶそうだが、長年いい慣れた単語なので看護婦さんですませてしまう、呼んでしまう、というより男の看護師さんに会った事が無いのもあるかも、といいながら、いやちょっと待て、半年前に箕面病院で胃カメラを飲んだ、そのとき先生の横で簡単麻酔をしてくれ何くれと手伝っていた若い男性がいた、助手だと思っていたが彼が男性看護師かも知れない。体力の要る現場、男の方が向いている作業もある、なるほど男の看護師も大切だ。もう一つのそれる話は、看護婦さんの帽子の話「最近、看護婦さんのあの白い帽子を見ないなあ・・・」と長らく不思議に思っていた、思い立って調べてみた。看護婦の象徴だったあの白い帽子、あれがだんだん廃止になってきている、ほとんどの施設で使っていない、というような事が普通になってきているらしい。理由は点滴などのチューブに触れてしまう、立ったり座ったり、右に左に身体を動かす作業の最中に、チューブに触れてしまう、医療機器を壊してしまうというように作業の邪魔になるということ。もう一つの理由は不潔なのだそうだ。あの帽子はなかなか洗濯できない、白い上下の看護服はほとんど毎日洗濯をするらしいが、あの帽子は糊付けして形を整えるのが難しく洗濯がしづららしい、洗濯もしないで何日間も被っていると細菌の温床になり不潔だ。病院のしかも看護婦さんが、細菌、黴菌の保持者だとはいただけないね。こういう二つの理由で廃止になったらしい。あの帽子にあこがれ看護婦になった、看護学校を卒業してやっとあの帽子の戴冠式に臨むというような事が無くなったのは寂しい限りとは、おっさんのノスタルジーかな。話は戻って「イテテ」の続き、毎年正月の前後に献血をしている、まだ20回には達していないかもしれないが、いい歳になってからせつせと通っている、もういい加減やめようと思いつつも、年に2回3回「献血お願いしよう」と書かれた赤十字からのしがきを受け取ると献血に行ってしまう。「オレのような年配者の薄い血よりも、元気な若者、中年の濃い血の方がいいのでは」と思っているが、とにかく元気な人の献血が少ない、全体の血液の保存料が少ないということではしがきに来るらしい。献血をした血液は二・三日のうちに病気や怪我の患者の体内に輸血されるそうで、献血する人が本人が知らないうちに病原菌や細菌に汚染されていても、その汚染された血液が検査以前に他人の体内に入ってしまう、輸血された人が自ずとそれらの保持者、キャリアになるという悪循環になってしまう。自分の検査のために献血を利用する、肝炎やエイズに罹っていないかという検査のための献血はやめましょうと書かれている。そのてん常連の献血者の血は、多少信用度が高い、ましてオレのような年配者、海外も行かない、不純異性交遊も無い、と書きながらも、無茶もしてみたいと、若いやつらを斜めに見て羨ましがっているオレがいる。

「ゆっくり休んでいってください、水分を十分に摂ってください」終わった後は待合室の椅子に腰かけ、ジュースを、コーヒーを飲み、テーブルの上の菓子をぱくつく。1週間ほど経つと“検査成績のお知らせ”というハガキが届く、これが楽しみなのだ。5回前、オレの場合は5年前からの数字が並んでいる「#印の表示ある方は、医療機関への受診を、お勧めします」と書いてある。4年前にコレステロール（CHOL）という項目に#印<272>が付いていたが最近#印は無い、今年のコレステロールは<241>だった。#印が無いのはいいのだけれど、献血の前の問診の時に「血圧が高いですね、特に下が高い、100の150です」と言われた。この言葉を聞いただけで、病気になってしまったように心が気持ちが揺れる「何と繊細な」と笑われるかもしれないが、こういう言葉、暗示には至極弱いのだ。5年ぐらい前から「少し高いね」と時々いわれる。

今日は朝から気持ちが重い、というのは朝一番の報道で、中東シリア、後藤健二という人が殺されたというニュースを知った。こいつを殺すぞ、という強迫を報道で知ってから1週間ぐらい、助かるかもしれないと思っていたが、遂に殺されてしまったらしい。何人かの日本人が、海外で、紛争国で殺されていったけれど、今回は予告殺人、殺すぞという脅迫が何回か繰り返され、やはり殺されてしまった。何とも手の施しようがないけれど、重苦しい気持ちで今日一日が過ぎていった。

石器時代というけれども興味がなかった、あの石がヒトの造った物か、ただの石ころか、どうが違う、たとえ造った物としてもあの石ころから絵が描けない、話しが浮かび上がってこない。博物館のジオラマ、想像画には、獲物を追うヒト、彼らの服、彼らの住居が描いてあるが、あれは信用できるのかと不思議に思っていたが、好きなように想像し、絵空事を作り上げる分にはそれもよし、ただ博物館では・・・？くらいに思っていた。ちょうど“ふらふらペインティングの旅：北海道”をやっている少し前に、日本の石器時代捏造事件が起こり、大騒ぎになった。北海道でも東北地方でも、遺跡はたくさんあった「石器時代はこちらが本家なのか」と驚いた、関西に住むオレにとって、京都や奈良の考古学しか知らなかった、地元にも弥生時代の遺跡<茨木：奈良遺跡、博物館まで建っている>があるが、奈良・京都の華やかさに比べいかにも地味、石ころや、くすんだ勾玉を見ても思っていた。

小林達雄著<縄文の思考>日本列島に人類が姿を現したのは、一体いつのことか。人類学・考古学の最大の関心事ではあるが、依然としてその詳細を見極めることはできない。少なくとも約3万年前から1.5万年前までの、いわゆる後期旧石器時代に相当する遺跡は北海道から九州まで1万カ所近い多数が発見されている。<略>約3万年以前の日本列島各地にはナウマンゾウ・オオツノジカ・バイソン・北海道にはマンモス等の大型獣が群れをなしていた。あれだけ図体の大きな動物が入り込んでいるからには、同時代に生きた人類はチャンスさえあれば当然容易に渡来できたはずである。だからこそ、その足取りを求めて、意欲的な取り組みを始めた研究者グループが、1976年に登場し、宮城県座散乱木（ざざらぎ）遺跡の発見をもたらした。石器の出土層位は、従来知られていた石器群に比べて一段と古く位置づけられた。この重大な事実を見逃す手はない。大急ぎで発掘調査が計画され、実施に移された。するとたちまち、その熱意に応えるかのように次々と、期待通りの新資料の出土が報じられはじめた。考古学会はもとより、マスコミ関係者にも、輝かしい前・中期旧石器文化研究の幕開けを告げる大発見として宣伝された。発掘を推進した研究集団の錚々たる顔ぶれの言説は、天下の快挙とばかりに容認されることとなった。やがて、同様な遺跡の発見がその後も年を追って間断なく続いていき、発掘調査も着々と進められた。座散乱木（ざざらぎ）遺跡は、国の史跡に指定され、各地の博物館では最新にして最重要な事実として急遽、展示の中に組み込まれていった。教科書にも掲載された。国際会議の舞台でも発表され、世界に発信され、遍く周知されるに至ったのである。筆者もまた発見と進捗に大いなる期待を寄せていたひとりであった。宮城県グループは発掘の度ごとに古さを次々と更新するという勢いを加速させ、遂に10万年単位で50万年以上前まで遡っていった。大陸の北京原人同時代の仲間がいたことになったのだ。出土状態や地質学的観点等、強い否定論、捏造の可能性を主張する者もあらわれたが学会全体は微動に留まり、むしろ主流の勢いはいやが上のも増すばかりであった。2000年11月、驚天動地の悪夢がおとずれた。毎日新聞社の記者によって、発掘中の宮城県上高森遺跡の現場で、捏造現場をスクープされた。研究の当事者は、脇目も振らずただがむしゃらに古きへ古きへ遡ることのみ目的としていた故に、石器に対する初歩的かつ基本的検討さえもおろそかになっていたのだ。何よりも度重なる発掘調査のいずれもが、極めてずさんな調査であったという致命的な事実が明らかとなった。こうして、日本列島における3万年以前とみなされた遺跡のほとんどが学問的根拠を全く失った。

これを読むと、筆者先生も、捏造先生を擁護していた、応援していたようだけれど、捏造先生も“どえらい”事をしたようで、学会を、日本を、教科書まで巻き込んだ。これほど大きな騒ぎは今までになかった大スケールかも知れない。捏造先生も元は研究者、最初から捏造屋さんではなかったのか、それとも生まれた時からの捏造屋さんだったのか。他の捏造事件、日本やら外国やら、なかなか皆さん写真で見ると、立派な顔をしておられる。詐欺師なんて犯罪者、オレなんかよりずっと立派で、温厚で、人望のある顔をしておられる、だから皆さんだまされるのだけれど、詐欺師が「見た目、悪そう、うさん臭そう」では話にならないものね。これを書きながら、東北を車で走っている時「あの有名な、三内丸山遺跡をぜひ見たい」と間違えて、小さな遺跡発掘現場に行ってしまった。「ちょっと見せてください」と飯場に声をかけると、先生がぼそぼそ出てきた。「ここが、罌のあと」等と説明してくれながら、捏造の話を「誰も、何も、言えない、雰囲気だった」と苦笑しながら笑っていた。

わがアトリエで描いている清子さん「次はシーラカンスを描く」ということでシーラカンスの絵を描き始めた。永らく忘れていたその名前、その画像、思いだした、初めてその画像を見た時の驚きと感動を、いまだに実物は見た事が無いが若い頃に新聞紙面に踊っていた画像、TVに映し出され泳いでいる画像、何だ、この魚、すごい魚、甲冑を纏ったような姿、猛々しい姿なのに静かだ、すいすい泳ぐ今の魚に比べ、深い海でじっとしている、大きな眼だけはぎよろつかせている、前の水だけを見ている、岩だけを見ている、飾り物のようにたたずんでいる、ふらりと餌になる魚が横切ると、大きな口を開けてぱくりとひとのみ、そんなイメージを、そんな彼を想像していた。が思い浮かんだ。1940年頃釣り上げられたこの魚の写真がヨーロッパに紹介された、その写真を見たヨーロッパ人が「化石の魚に似ている」専門家が見ると「3億年前の化石にそっくり」と大騒ぎになった。「本物を探せ」「実物が見たい」「捕獲した物には賞金を出す」その後なかなか見つからなかったが、遂に釣り上げられた。3億年前の地層から出土した化石でしか知られていなかった魚が生きている、現存している事がわかり「生きた化石」として世界中で大騒ぎになった。「歩くように泳ぐ」「陸地を歩けるような胸ビレ・腹ビレ、そのヒレの中には骨と関節がある」「ヒレは全部で8枚」「背骨が無く身体じゅうが油のような液体でつまっている」「食べると不味い」日本人で食った人がいて、生で、てんぷらで、焼き物煮物で食ったそうだが、「ふにゃふにゃ脂肪を食っているようで、不味いというより味が無い」「全部が油のようだ」と不評。3億年の時間、進化することも無く、古代生物のまま、現代の魚と同じような場所で、環境で、生きながらえてきたとはすごい。ヒトらしきものなんて600万年前に地球上に姿を現した、3億年前といえば、恐竜の時代、隅っこで細々生きていたネズミか何かの哺乳類がだんだんヒトに成ったのだそうだ。生きた化石のシーラカンス、ヒトぐらいの大きさ、一枚一枚が硬そうで丈夫そうなウロコ、いくつかのヒレは見慣れた魚とは違い動物のよう、3億年の間ひっそりと生きてきた、深い海で魚を食って生きてきた、食っても旨くないが故に人はこの魚を捕まえなかった、アフリカの人たちは昔からこの魚がいることは知っていたらしい、シーラカンスがいることは知られていた。

もうひとつ面白いのが縄文土器。昔“岡本太郎”という画家が、どんぐり眼を開け“縄文土器”““火焰土器”を見ながら、絶賛し感激し「バクハツだあ」といっていたのを思い出す。何度か縄文土器の本物もレプリカも見た。器という日曜品ながら、装飾が、化粧が、どんどん増殖し、よくも石器時代の古昔、1万年前にこんな卦体（けたい）（けたい）（けつたい）、凄い形状を考え出したものだと、岡本太郎同様感激し叫びたくなるが、「バクハツだあ」とはいわないね。芸術品との想いは全くなし、祈りやマツリを連想させる、カミがのり移り、彼か彼女の手が動き、目はうつろに土を見て、次の瞬間見開いた目が形をとらえ、右の手が、左の手が勝手に動き、器が造られていく。見た事のある博物館の模型が、ジオラマが本当ならば、藁屋根の下、窓のない薄暗い空間で、粘土を捏ねているのは男か女か。遠くから採ってきた、運んできた土を捏ねて粘土を作り、その粘土を転がしてヒモを作る、ヒモを重ねて上へ上へ形を造っていく。大きな葉っぱでもあればそれをロクロのように回転させる、それともヒトが回転しては形を整え、また回転して形を整え、ぐるぐるヒトが廻るのか。器の形が出来上がったらここからは、かの縄文氏の腕の見せ所、口に水を含ませて器に吹きかけ「まだ乾くなよ」と声をかけつつ突起物を貼りつけていく。器の表面は棒やへら、縄や葉っぱで表情を付けていく。突起物は時には顔の形が、ヒトの形が、動物の形が、花や葉の形がひつついていく。「今日はここまで、これ以上すると形が崩れる」水を吹き付け葉っぱを巻いて「次まで、崩れないよう」と声をかける。再び藁屋根の下で葉っぱをはがし、棒やへらで形を整えていく、時間をかけて、ひにちをかけて、出来上がった粘土を屋根の下で乾かす。穴を掘って乾いた葉や木を並べ、乾いた出来上がった粘土の器を置き、上から葉や木を並べ火をつける、上から土をかぶせる、横から木を差し込む、火が勢いよく燃える、踊りながら、歌いながら、吠えながら、木を燃やし時を待つ。そんな作業をしている石器人が見えてくる。考えながら造ったのか、造りながら考えたのか、手を動かし、棒を巧みに使い、縄を上手く使う、夢中になっての作業、腹が減っては干し肉を食い、ドングリやヒエやアワを食う。造っていたのは男か女か、一人で細々草の屋根の下で作業をしていたのか、数人でワイワイ話しながら陽気に造っていたのか。縄文土器は素晴らしい、土偶も素晴らしい。

昔からの友人、榊井君の店の前を通り過ぎ、一路明神平登山口へ。「帰りに寄ろう」と思いつつ狭い道をどんどん奥へ。ここは5回ぐらい来ている、丹生川上神社、まだまだ集落がある。こんなに山奥、今でこそ車で来られるが、歩いていた時代、除雪も無い時代には冬は籠りっきりの大変な集落だろう。4日前に女性3人組と愛宕山に登った。登り2時間の山だけれど、1時間目ぐらいから雪が出始め、てっぺんは膝ぐらいの雪が積もっていた。テントを張って鍋とビールで大はしゃぎをしてきたばかり。今日は登山口手前の林道で10センチぐらいの雪が積もり、寒さで凍っている処もある。さあ今から明神平に登る、気温は1度か2度、雪が積り横に川が流れる林道。朝の光がキラキラ、久し振りの陽の光、今日はサングラスが要るぞ。山側から水が流れている処が凍っている「やばい、つるりんだ、ピッケルの出番、ひっくりかえったら、いててだ」ペリペリ音がする、その透きとおった氷の下を水が流れている。なんだか久しぶりの暖かい太陽、雪が光る、キラキラ光る、氷が光る、水が光る。横を流れる川は、幅が20メートルぐらい、岩ゴロゴロ、もうすぐそこが山だという谷筋、大水の時に大岩が落ちてきた、でっかい岩、水がどんどん流れている。川の石ころの上、木の枝の上、山の斜面の上に、ふわりと降ったばかりの軟らかそうな雪、水墨画の世界、墨一色で上手く描いている、雪も枝もこのうすら寒さも、彼ら上手く描くだろう、これにポタン雪など降ればもっと雰囲気が出せるが、登るにはポタン雪より陽の光が有難い。向こうに見える山の上から太陽が顔を出している、暖かい、これは最高、今日はいい天気恵まれそう。いよいよ登山道、どんどん登る、渡渉がある、濡れるのは嫌だなあと思いつつ下を見ると、上手く石が並んでいる、おまけにロープが張ってある、そのロープをつかみつつ、簡単に渡渉が4、5回それからは登りだ。今日は祝日、たくさんの人が登っている、車もたくさん止まっていた、踏跡が充分についている、歩きやすい、ズボ足で歩ける、アイゼンの跡はあるが、雪を踏みしめて登っていく。重い雪、湿った雪、靴底のエッジを効かせ、滑らないように登っていく。靴底を雪に着け、雪を掴むように歩くと滑らない。一歩、雪を掴む、咬む、次の一歩、また雪を掴む、咬む。登る時はこれ、下る時はかかとできゅっと止まる、次の一歩もかかとできゅ、この程度の雪の斜面はこれでよし。太陽も本気には晴れていない、薄ぼんやりと照っている、この斜面、踏み跡が無かったらラッセル、これはたいへんだ、3倍も4倍も時間がかかる、体力が要る、とても上まで登れない、ずるずる滑って大変だ。

登って来た、白い雪、何度か来た山、見覚えのある処にやって来た、もうすぐテントを張って泊まった事のあるピークの一つ、水場が出てきた、登りきればそこだ。風が出てきた、冷えてきた。久子さんが「インナー手袋がいいですよ、手袋のまま、いろんな作業ができる、カメラのシャッターも押せる、アイゼンも付けられる、ジッパーもあげられる・・・」なるほど薄いが暖かそうな手袋、手にフィットしている、早速買わねば、今の分厚い毛糸の手袋はいかにも骨董品。これから明神平を通過して、檜塚奥峰まで行く、元スキー場のなだらかな斜面、ふわふわ雪、カンジキを付ける、これを付けてもふわりと潜るが登れる。今年はカンジキデビューの年、去年2000円で木製雪国カンジキを買ったがあれはおもちゃだった、カンジキが靴より小さかった、一度使ったが「これはだめだ」と思った、冬の前にアルミ製のカンジキを購入した、低い湿った雪には最適。新しいアルミ製カンジキ何度か使った、比良に3回、高島トレイルに、此処にと大活躍。「このねじ曲がったミズナラの木、見る度に、がんばれ、と言っている」なるほどここの尾根道、太い木が多い、今は葉が落ち、右も左もよく見える、雪が幹に枝に貼りついている、人の大きさぐらいの太い幹が横むいてねじれ、ねじ曲がった太い幹の半分が削られて洞になっている。その洞に小さい木が数本生え立っている、暖かい季節には、太いミズナラも葉を茂らせ、その小さい木も葉を茂らせているようだ。ミズナラには迷惑な話、将来どうなるんだ。その木を見ると頑張れと言いたいんだって、そんなすごい木、絵にでも描ければ、写真でもうまく写せたら、といつも思う「えかきのぼやき」ここは台高山脈、檜塚奥峰、360度ぐるりと展開、磁石で北はこっち、木の枝の白い雪、餅菓子のようについている、少し下は風がきつい、木の幹に雪がトゲのようにクサビのように突き刺ささり貼りついていた。ここは三重県、山また山、大峰奥駈道の山々も高く見える。風の強いてっぺん、土が草が見える、枯れ木、枝、根っこ、不思議な世界、白い世界。元気な木も高くそびえる、枝に雪が乗っている、南側の斜面には雪が少ない。北側の斜面の木には、これでもかこれでもかと雪が吹き付けられ、木の幹の半分はトゲのようにクサビのように雪が刺さっている。

15-013 来廊御礼 190215

いよいよ展覧会が近づいてきた、初日が3月23日、27日に1000円パーティ、28日に終わる。場所は去年同様、新大阪駅付近<シエスタ倶楽部>なり。パーティの日以外は、酒は飲まないぞと下らないことを思いつつ、今のうちに来廊御礼の文章を考えておこうと思いついた。

来廊御礼 <岡村隆久展> 2015年3月

遠いところ、足をお運びいただき、ありがとうございます。

ここの会場は何回目かなと調べて見ましたら、今回で5回目のようです。

魚が泳ぐ、ゆったりとした椅子、重厚な壁、コーヒーをどうぞ。

一年前に「これからは、絵を描く事、山を登ること、この二つしかしないぞ」と決めた。

山には何回も登った、若い頃のように“アルプス一万尺”は遠のいたが、それでもたくさん登った。

この一年の圧巻は、なんといっても“大嶺奥駈道”だった。

行く前から、若くはない今、20キロを超える荷を背負って、7日間も、縦走できるのか・・・と疑問だった。

滋賀県の山、奈良県の山も何度も登った。

若い頃のように、「それいけ、やれいけ・・・」とは登れない。

今は、樹が気になる、奥深い山に分け入ると、太い樹、枯れた樹、ねじまがった樹、がたくさんある。

そんな樹を見るのが、楽しみだ。緑で生い茂った景色もいい、枝ばかりの時もいい、雪もいい。

絵の話。

絵を描く、日々、描く、“次の一手”が決まらない、思案しても、決まらない。

今は、絵を描く、日々、描く、“次の一手”がすぐ浮かぶ、少しの思案で、絵ができる。

これは嬉しい限り、たくさんの駄作を、どんどん造っている。

いやというほど描いてきた、まだまだ面白い。

「絵なんて所詮、画面の中、色の、くみあわせじゃねえか」

「絵なんて所詮、画面の中、面積と面積の、せめぎあいじゃねえか」

そんな、「所詮の」時空の中、とぼとぼ歩いてゆかなければ、止まれば、終わってしまう。

「ふるくさい・・・」と言っていたけれど「たかだか 50年 100年 じゃないか」と言うようになった。

そんな“たかだか”を、ケンケンガクガク、罵っていたけれど、もう全てが、素晴らしく感じる。

まだまだ描かなくては、まだまだ描きたい、そう思う。

次回もよろしくお願いします。

このように書いてみたが、この時こう思った、これは失敗だった、これが欲しかった、というような事が頭に浮かばず、心象風景が、ふわりと風に流されるように、情念は出て来ない。自分の絵のことで、情を込めては語れないね、本当は、情を込め、想いを込め、切々と、悲哀と歓喜を恥ずかしげもなく語れば、もうちょっとはましな、絵が描けるか、絵が好かれるか、オレが好かれるか。でもなかなか、抽象的な、心象的な言葉になってしまう。昔、思ったが、美術評論の先生連の言葉は難しい。その点野球の評論家というのか解説者は「ボールがもう3センチ上ら・・・」「ライトがもう5センチ高く飛びあがっていたら・・・」というように、野球の臨場感をそのまま激した言葉で語っている。美術評論の先生連の哲学文章が、そのまま作品になって、美術作品を超え、美術館を超え、風になっているからいいのかな。というような事を言うと「こらあ、ドシロウトが・・・」と怒られそうだが、あの哲学分には参りますねえ。

この週末は、久子さんの故郷、富山の福光という処に雪かきに行く。雪かきも行き出して画廊<シエスタ倶楽部>と同じくらいの回数になるのか、年々雪の量が減ってきている。「今年は去年より多そうだけれど、例年よりは少ない」とは、先日、山を同道した久子さんの弁。

昼ごろに、富山にやって来た。北陸自動車道、金沢東ICを出て国道304号線を南砺市方面へ10キロぐらい、高窪バス停下が目的の家、我が久子さんの実家、もう20余年空き家になっているが、毎年何回も兄弟で集合されるらしい。「今日は快晴、山びより、明日は雨の予報、今日登りませんか」「いやいや、今日は今から雪かき、がんばらないと、せっかく来たのに」「雪かきは雨の日でも、晴れた隙間をぬってできるが・・・」「それじゃ山へ行ってしまうか・・・」「荷は全部積んでいる、登山道具はある、行動食もある、3時間の山だ、簡単食と水があればいい」ということで急遽これから登山ということになり、雪かき現場を通過、五箇山方面に走る。「たいらスキー場の駐車場に入れましょう」高速道路サービスエリアで“生姜焼き定食”を食ったばかりで腹は大きい、おやつのでーナツをリュックに、スキー場のレストラン厨房でペットボトルに水をもらう「さあ出発1時半だ」「地図では林道を歩く、お宮さんを超え、上の林道に行く、しばらくして尾根に取り付く、2時間で頂上、越形山」スキー場、音楽がスピーカーから聞こえる「ワア～」「キャア～」叫び声、楽しさ満開、海水浴場と同じような雰囲気、永らく忘れていた世界だ。明るい陽射し、そんなスキー場の麓を横切り林道へ、たっぷり雪が積もっている、除雪された林道は歩きやすいが横には2メートルも3メートルも積もっている。関西とは雪の高さが違う、色も気のせいか白く輝くように思う、午後の暖かさ、背の高い針葉樹からドサリと雪が落ちる、頭が濡れる、背中に入ってはたいへんとフードを被る。歩き出して1時間、富山の山、この低い山、1000メートルにも満たない山だけれども、雪の絶対量が違う、たっぷり積もった雪、林道でわかんを着けた、ワカンを着けても潜る、先行の二人、60キロの彼がスノーシュー、50キロの彼女がワカン、70キロのオレは先行の踏み跡をさらに10センチ20センチと潜る「真っ白い雪、潜る、暑い、汗が流れる」「赤いスパッツ、黒いパンツ、緑色のシャツ、青い空、左下には荘川がぐにやりと曲がって流れている」「黒い川、黒い道、黒い木々、それ以外は雪に覆われている、白と黒の地球の形」相当登って来た、微かに聞こえていたスキー場の音楽はもう聞こえない。ラッセル交代で前に出た、一步一步が潜る、膝ぐらいまで潜る、一步一步登って行く、植林された杉の木々が続くが「どうもこれは根元から相当上の景色、杉の木がもう少しでてっぺんだ、まさかとは思いがこの辺りの尾根、5メートル、10メートルも積もっているのか、本当にそんなに積もるか、杉の太さは細いもので直径20センチ、太いもので40センチ、これが根元に行けばそれぞれ20センチ増しになれば納得、普通の景色、杉の木のこんな上の方を横に見ながら歩くのは不思議な世界、空中庭園の世界。「あ、これは杉ではない、檜だ」

予定通り2時間ぐらいでスキーのリフト用鉄塔が見えてきた、その奥に白い反射板が立っていた、360度展開している景色、霞んで劔岳が、白山が、去年登った牛嶽が見える、3:30、陽の光も夕方の様子、頂上はポッコリならかな平地、雪の無い季節は草なのか、土なのか、石なのか、2月なのに温かいてっぺん、水を飲み、パンを食い、景色を満喫。

一口メモく反射板、山でよく見かけるけれど、あれはなにかな>ネットで調べてみました。山の上で、10メートル四方の白い板が、鉄の支柱に支えられ、建っているのをよく見かける。あれは何に使うのかといつも不思議に思っていた。正式名称は“電波反射板”<電波での通信用に使われる。地形上、パラボラアンテナでは通信できない場合、反射板で電波を反射させて、進路を変え、通信できるようにしている>パラボラアンテナが何で、通信が何で、電波が何なのだ、という難しい事は、皆さんが調べてください、オレも知りません。これを調べるまでは、測量用の目印かなと思っていました、昔の三角測量点の石の代わりにあの白い大きな板を目印に、あちらこちらかな測量する、それこそ目視ではなく、電波を使ってその波で測るのかなぐらいに思っていました。

5:00車に戻って、着替え。ひとりを福光駅に迎えに行き、そのまま温泉に直行、スーパーマーケットに立ち寄り今晚の食料、そして今晚のねぐらに帰ろうということになった。温泉は村の中、村の人たちが知恵を出し寄って造ったような趣のある木造風建物、ショウウインドウにはテン、ハクビシン、タヌキ、アライグマ、タカ、と小型の山の獣たちの剥製がずらりと並んでいる、山の中で活発に動き回っている小型の獣たち、ここに来るとこれをいつも見入ってしまう。汗に濡れた下着を全部替え、暖かくなって、ご機嫌で買い物に、今宵の鍋材料、刺身、フライ、果物と籠に入れ、ねぐらに着いた。

雪かきにやって来た、ここは国道 304 号線、高窪バス停の下にある家「坂の下まで車で行ける、玄関まで普通の靴で行ける、車を止めたすぐに埋められた水道栓も素手で開けられる」それぐらいに今年も雪が少ない。去年も少なかったがそれまでは、坂には除雪車が入っているが、車の扉を開け外に出るには長靴が要った、玄関の扉を開けるまでにスコップで雪を取り除いた。入口は庇があるので扉は埋まらないが、腰辺りまでの雪の深さ、1,2 か月経つと雪も固くなり鉄のスコップが要った。今日は気温がなんだか暖かい、厳冬の 2 月、暖かい日を待ち望んで寒さの中で過ごしているはずなのに温かい。昨日昼ごろに金沢に着き、「快晴だ、山びよりだ、この陽の光を逃すてはない」ということで此処を通過して「たいらスキー場」に車を走らせた。朝起きて家の周りを見渡した、さすがにこれから雪かきをしようとしている家の周囲は積もっている、前面は正月にすませたという通り普通の靴でも歩けないことはないが、後の三面は長靴が要る、長靴をはいてもズボリひざ上まで潜る、今年の雪は柔らかそうだ。国道 304 号線は田舎にしては交通量が多い、トラックや乗用車が次々通過していく。家の周りは杉が茂っている、黒い瓦に漆喰の白い壁、木造の家が散らばった、十軒ぐらいの集落、雪はおおよそ 1 メートルぐらい積もっているだろうか、それがデコボコになって高いところは背丈ぐらい、低いところは膝ぐらい、無い処もあってまだら模様の村の姿。

勝手知った家の奥から鉄のスコップと長靴を引っ張り出し裏に廻った。裏はたっぶり屋根の雪が落ち、ダンパー 1 台分ぐらいの雪が積もっている。まずは雪を棄てる道作りを始めた。屋根から落ちて積もった雪も硬くない、スコップを差し入れるだけでぐらりと崩れる、その塊を塵取りタイプのダンプに乗せ横の川にザブーン、それを繰り返しているうちに去年のカンが戻ってきた、ザブーンを何度も繰り返して 1 時間もするとちょっと休憩。「いつでも何かを食べている」と言われる通り、リュックに残っていたドーナツをひとつほおぼった。午前中の 3 時間で雪はずしは少なくなった。「雪に踏まれ、折れ曲がった竹の先を切ろう」とノコギリとハサミを持ってきた。大きく跳ねるから危ないので二人がかり、「おさえといて」太い幹を切ってもまだまだ抜けない、枝を幾つか切ると、形状記憶の竹君、勢いよく天に跳ね上がった、これは子供や女の人ひとりでは危険な作業、跳ね上がる力はすごい。雪山で小さい木の枝がビューンと跳ね上がることもあるが、この竹ほどの威力は無い。昼飯は、おでんにうどんにコロケ、昨夜の余り物、山でも雪かきでも腹が減るので何もかも旨いどんどん口に入る。午後は 2 時間ぐらいで作業終了「ここまでしたら、後は溶けるのを待つだけ、一か月もすれば雪は消えてしまう」「ご苦労様でした」と雪かきを終了、雨は作業終了まで待ってくれた。昨日と同様、風呂に、スーパーマーケットにと出かけた。

3 日目の最終日、朝、村を散策した。暖かい、妙に温かい、この暖かさ、田圃の雪が溶けている、白い部分と黒い部分が半分ぐらい、黒い部分は水田になっている。里山の村、10 軒ぐらいと思ったが、20 軒ぐらいはあるだろうか、立派な家々が散在している、隣どうしが重なりあったような二、三軒、ぽつりと離れて建っている一軒、屋根は真っ黒いピカピカ光った瓦、二階の壁は白い漆喰、一階の壁はしっかりした板張り、焼いた黒壁もある、漆喰の壁にはこの地方独特の柱と梁が縦に横に並んでいる、どっしりと重厚な昔からの日本住宅、がっちりした木造建築だ。今は朝の霧が晴れかけてはいるが空はどんより曇っている、村を突き抜けて小高い丘に登った。でっかい犬を連れた婆ちゃんに会った、天然パーマがくりくり、ゴールデンの色、調べるとプードルだとか、小型のこれは都会でよく見かけるが、我がゴールデンレトリバーの小紅君と同じような大きさ、放し飼いの彼がオレにすり寄ってくる、大きいから大丈夫かなと恐れつつ、彼はジワリとすり寄ってくる「咬まないよ」と婆ちゃんいうけれど、この大きさ、ちょっと引いちゃったね「ふにゃふにゃ」「え・・?」「あんたんち、犬飼ってるやろ」3 度聞き返してわかった、「オレは犬に好かれるんだ」と思いつつ丘へ。里山に残る雪、ペチャリと山肌に、樹の幹に、田圃に、庭先に、いろんなところに白い雪が貼りついているが、この暖かさ、半月もすると溶けるだろう。丘の上に登った「立ち入り禁止」と書いてある「この辺りは、針葉樹、広葉樹の自然林を植えて植生の実験中」だとか、昔の風景に戻そうとしているようだ。緑の丘がポコリポコリと向こうまで続く、所々に白い雪、整備されていない林道がくねくね、人は入らない自然の姿、これはいい、いい景色だ、見とれた、美しい。